

## ディケンズが求め続けた女性像

鴫 田 壘

ディケンズが描く女性には、どこか共通したところがある。初期の作品に出てくるヒロイン達と、晩年の作品に出てくるヒロイン達とでは、多少感じが変わっているが根本的なものにはそんなに違いはない。当時の社会情勢のせいかもしれないが、だいたいのヒロイン達は小柄でスマートである。純真無垢で愛らしく、美しく、心根の優しい、ただ傍にいてくれるだけで周りの人々を幸せにしてしまうような少女達である。ディケンズは大衆うけするように、読者の反応を見ながら作品を書き進めていったと言われている。このヒロイン達はもちろん、読者誰もが心の中で求めていた女性ではあったろうが、作品の中でヒロインがヒーローではなくてならない存在として書かれているところから、一番求めていたのはディケンズ自身であったようである。

何故、ディケンズは現実と創作の世界の中で、女性を見つめることに重点を置いてきたのだろうか。そしてディケンズが心の底から求め続けてきた女性とは、いったいどのような女性なのだろうか。

ディケンズが描くヒロイン達と、ディケンズが実生活で接してきた女性達とは、かなり深い関係にあるらしい。それもディケンズが愛した女性となれば、尚更のことである。

第一にマライア・ビードネル、彼女はディケンズの多くのヒロイン達を作った人物である。マライアはディケンズの初恋の人であり、彼女自身意識していないまでも、ディケンズに本当の家庭の暖かさを教えた最初の人であった。だから、ディケンズがマライア家へ幾度となく通ったのは、単にマライアに会いたいという気持からだけでなく、一家の団樂

に加わりたい気持ち大いにあったようである。<sup>1)</sup> ディケンズより一歳年上ではあるが、「濃い巻毛の小さな魔女といった趣きで、顔をしかめると非常に眉間の狭くなる容貌であった」<sup>2)</sup> マライアはディケンズの心の大半を占めていた。マライアがディケンズにとっていかに大切な存在であったかを語っていると思われる一文が、『デイヴィッド・コパーフィールド』の文中に見られる。

この世の中の虚偽と災難が蓄積されればされる程、この世の遙か彼方にあるドーラの星は明るく純潔に輝いた。私はドーラがどこから来たか、或いは彼女がどんなに天使に近い状態に位置していたか分かってはいたはずがない。しかし、私は普通の娘同様、彼女がただの人間として存在するというばからしい考えを、憤りと軽蔑をもってはねつけたらろうということだけは確かだった。<sup>3)</sup>

ディケンズの描くヒロイン達が外面的な美を備えているところから察すると、マライアは美しい女性であったようである。しかしディケンズがマライアに魅かれたのは、外面的な美しさだけによるものではないようだ。それは、マライアがディケンズになくてディケンズが欲したものを持っていたからであろう。暖かい家庭に裕福な暮らし、優しい母と頼もしい父、大きな家と家庭の味、俗世間のことなど何も知らない身も心も清らかな少女。これらは総て、ディケンズが求めようにも手の届かなかったものばかりである。

これ程までに、ディケンズはマライアに魅かれていたのに、マライアの両親の強い反対で二人の関係は冷たいものになってしまう。マライアの両親が反対した大きな理由として、ディケンズの両親が以前マーシャルシー債務者監獄に投獄されていたこと、そして当時のディケンズの速記者としての収入が不安定だったことなどがあげられるが、ディケンズにとって何を言われるよりも、経済的なことを言われるのが一番辛かったようである。靴墨工場時代になめた苦い経験を、大人になってからも

失恋という惨めな形で味わねばならないとは夢にも思っていなかっただろう。しかし、この経験が後に、ディケンズのあらゆる苦境にも耐え抜いていくエネルギー源となり、支えともなっていたのである。だが一方でそれは、ディケンズの繊細な心の中に消えることのない深い傷を残したことも確かである。

マライアとの別離後、二十二年もの間、ディケンズはマライアの面影を心の片隅に抱き続けてきた。そして、二十二年たった後に大作家となったディケンズの許へ、既に結婚し三女の母となったマライアから一通の手紙が届く。ディケンズはその手紙に対して次のような返事を書いている。

私のように、こんなにも誠実で不運な恋をささげた人は一人もいないといつも信じています。私に属するどんな空想も、夢も、活力も、激情も、熱情も、決断も、無慈悲なかわいらしい女性——何も言わないあなた——から切り離そうにも切り離すことができませんでした。私はあなたの為なら、喜んで死にもしたでしょう。……私の愚かな青二才時代において、あなたの名前の響きはいつも一種の哀れみと尊敬で私を満たしていました。それは、私にとって全世界を代表する一人の人間に与えるべき深い真実なのです。<sup>4)</sup>

この手紙を見ても、ディケンズがいかにマライアを愛していたか、そしてどんなに彼女を愛し続けてきたかということが分かる。しかし、人間が歳をとるということは避けられない事実である。いつまでも昔のままの姿でいることはできない。ディケンズの心のアルバムの中でのあどけない少女マライアは、この二十二年もの間に消え去り、総てにおいて魅力的で天使のようであったマライアが、今ではわがままなつまらない女性になっていた。これはディケンズにとって大変な衝撃であったが、いつまでもディケンズの心の奥底につかえていたマライアへの未練が、これできれいさっぱり無くなるわけである。

マライアをディケンズの人生における初期のヒロイン像とするならば、晩年のヒロイン像はエレン・ターナンである。「この女性との邂逅は、ディケンズの日常生活はもとより彼のヒロインに大きな変化をもたらした」<sup>5)</sup>とも言われているように、エレンはディケンズの作品に新しい生命を吹き込み、ディケンズ自身にも多大なる影響を与えた。

エレンとの出会いは、ディケンズが四十五歳、そしてエレンが十八歳の時であった。この翌年に、妻キャサリンと別居することになるが、別居したからといってエレンの愛は得ることができなかった。「家庭」を何よりも大切に思っていたディケンズが、何故、家庭を捨ててまでエレンの心を得ようとしたのだろうか。

ディケンズの晩年の作品である『大いなる遺産』に登場するエステラと、エレンはどこか相通じるところがある。この作品の中で、主人公ピップがエステラによせる恋心を切々と語る件りがある。

本当の真実は、私が男性の愛をもってエステラを愛した時、彼女がただ魅力的であったから、彼女を愛したということである。生涯をかけて、私は理性に逆らい、将来の見込みに逆らい、平和に逆らい、希望に逆らい、幸福に逆らい、起こるであろう総ての失意にも逆らって、彼女を愛しているにもかかわらず、しばしば私は悲しみに気がついていた。私はそれを知っていても少しも変わらずに、一生に一度の愛を彼女に捧げた。<sup>6)</sup>

ディケンズは、こんなにも激しくエレンを愛していた。エレンは女優をやっていただけあって、きっと美しかったのであろう。この文が語っているように、ディケンズはエレンに抗しがたい程魅惑されエレンの虜になってしまったのだ。理性なんてものを捨ててしまっ、エレンを自分だけのものにできるという確信もないのに、心は何時となくエレンを求め、あんなに大切に思っていた家庭を自らの手で破壊してしまった。後に待っているのは失望と後悔だけだと分かっているが、どうしても彼女を愛さずにはいらなかったのだ。こういう感情は、もはやマライアに対

する少年の恋ではなくて、大人としての愛に変わっている。しかし、たとえエレンの愛が得られなかったとしても、今までとは違って現実に近い女性が描けるようになったということは、ディケンズにとって最大の戦利品であったと言うべきである。ディケンズは晩年に至って初めて、エレン・ターナンから本来の女性の姿というものを教わったのである。

結婚後も、ディケンズが理想の女性を求め続けたことについては、妻のキャサリンにも大きな原因があるに違いない。ディケンズがキャサリンに宛てた手紙の中に、部屋の乱雑さを注意した手紙や、キャサリンの嫉妬をなだめた手紙、機嫌をとろうとしている手紙などが多いことから、妻はなかなか短気でだらしない女性であったようである。必要以上の嫉妬や怒りというのは、愛する人を遠ざけるのに十分な理由となりえる。相手を心から思いやる気持があれば、ある程度の怒りなど飲み込めるはずである。しかし、それが怒りとなって外面に出てしまったということは、よほど自分に自信がなかったのだろう。心から信じるものがあれば、自ずと自信もつくものである。これは新婚当初から、二人の気持が一つになっていなかった証拠であるといえよう。

二人の間には十人もの子供がいた。ディケンズが小説の中で生み出した多くの子供達の他に、実際に十人もの子供達がいたのだ。子供が多すぎたということも、直接影響を及ぼしていないにしても、間接的には二人の別居の原因となっているようである。

母から母性愛を感じることができなかったディケンズは、キャサリンに妻と母の二役を同時に求めていた。しかし、キャサリンはディケンズのこの欲求を満たすことができなかった。又、ディケンズが幼少の頃から夢見ていた家庭と、実際自分が生活していた家庭とは大分違っていた。特にキャサリンに対して不快感を抱くようになったのは、義妹メアリーが死去してからである。

メアリーはキャサリンの妹で、ディケンズ夫婦と同居していたが、わずか十七歳でこの世を去ってしまう。キャサリンとメアリーは二人で一

人だった。メアリーの生存中は、キャサリンはディケンズにとって妻の位置にいたことができた。しかし、メアリーの影が消えて一人となったキャサリンは、ディケンズに対して苦痛を与えるばかりで、安らぎを与えることができなかったようである。そしてメアリーの存在はディケンズの心の拠り所となっていたらしく、死後はディケンズの心の中で美化され、美しく控え目で純真なヒロイン達を生むきっかけとなったようである。

幼い頃、母親に一生心に残る傷をおわされ、初恋の女性マライアには冷たくされ、心の拠り所であったメアリーには先立たれ、そして妻キャサリンには愛想が尽きた今、ディケンズを支えていたものはエレンに対する愛情と、ディケンズの描き出す世界に生きるヒロイン達であった。とりわけ晩年のいくつかの作品の中で最高傑作と言われている『大いなる遺産』こそ、ディケンズの本心を語っている作品といえよう。そしてその中に登場するヒロイン、エステラ (E, T という二文字が両者の名前に含まれている<sup>7)</sup>)こそ、実生活とだぶった愛情の筆を以て描かれた女性であったようである。したがって主人公ピップとエステラの交わりを通して、ディケンズが求め続けた女性像を多少なりとも感じとることは可能であろう。

前にも述べたように、Estella の E, T は Ellen Ternan の E, T だと言われている。ディケンズはエレンをとっても愛していた。ピップもエステラをとっても愛していた。

ピップとエステラがまだ幼い頃、二人は暗いミス・ハヴィシャムの屋敷で初めて出会う。この時、ピップはエステラの光輝く美しさと大人びた様子にびっくりする。前にも述べたようにディケンズが初めてエレンと出会ったのは、エレンが十八歳の時であった。その時のエレンは美しく落ち着きがあって、とても十八の少女には見えなかったのかもしれない。ピップとエステラの初めての出会いが、このエレンの印象とまったく無関係のものとは言い切れない。

エステラは、結婚式の直前に相手の男性に逃げられて少し気がふれてしまった女性、ミス・ハヴィシャムの養女として育てられる。そしてミス・ハヴィシャムの男性への復讐の為に、エステラは世の男性を総て魅了してしまうような美を身につけ、とても高慢に冷たく振る舞う。しかしピップはどんなに冷たくされても、エステラを愛さずにはいられないのだ。エレンもディケンズに対して、どちらかというところ冷たい態度で接していたらしい。手を差し伸べればすぐにでも届くところにいるのに、心は遠く、まるで海を一つ隔てたところにいるようであった。

ディケンズはエレンの為に家庭を捨てるが、ピップはエステラの為に一生の友と決めたジョーを裏切ってしまう。そして昔のみすぼらしい自分を捨て、「gentleman」になるためにロンドンへと向かうが、育ちというのは恐ろしいもので、どんなに生まれ変わろうとしても今までの生活を総て白紙に戻して自分をつくり変えるのは不可能である。ピップがどんなに頑張ってみたところで、エステラの前では「粗野な下品な少年」にすぎないのだ。しかし年月と共に、二人の間に微妙な変化が生じてくる。二人にとって一番大切なものは何かということ——豊かすぎる富でも名誉でもない——もっともっと大切なものがあるということを心の奥の方で感じはじめるのである。これは、ディケンズが晩年になって身を以て感じたことであった。ただ単に、経済的な条件に恵まれていなかったがために靴墨工場で労働を強いられ、マライアを失ったディケンズは、「gentleman」にならねばと豊かな富を築き名誉を受ける為にがむしゃらに働いてきた。そして念願のギャッツ・ヒルでの生活を手に入れるが、ここでの生活は「義務」以外の何ものでもなく、精神的な満足は得ることができなかったのである。

エステラは度々ピップに「あなたは、私にはハートがないということを知らなくてはならないわ」という言葉を投げかける。この言葉の裏では、「あなたに好意を持っているけれど、私の心は私の物ではないの。あなただけは傷つけないわ」と言っているように聞こえてならない。まるでエレンがディケンズに対して投げかける冷たい言葉を、ディケン

ズがこのような願いを籠めて言い換えているようである。ディケンズは具体的に文章化して表に示さないまでも、エステラのピップに対する行動や言葉の裏に、エレンがディケンズに対して抱いて欲しい好意的なニュアンスを含めたのかもしれない。エステラがそのままエレンの姿であるとはいえないにしても、エステラがピップに対してとらねばならぬ冷たい言動の中に少しでもピップを期待させる要素が含まれていたとしたら、その陰にはエレンがいるのである。

エレンとディケンズの間には二十七歳の年齢の開きがあった。ということは、ディケンズの娘達と同じような年齢である。長女のメアリーより一歳年上で、ケイトとは同い年である。だから、エレンに対してディケンズは常に大人でなければならなかった。マライアの時のように、感情が抑えきれず、取り乱したり哀願したりなどという行動は、差し控えねばならなかったのである。しかし、恋愛感情というものは年齢をとったからといって穏やかになるというものではない。まだ、若さにまかせて吐き出す方が楽かもしれない。愛とは、年齢にかかわらず強く激しく求め合うものだろう。ディケンズはエレンをとっても愛していた。しかしディケンズは大人である。大人としてエレンに接するのは、ディケンズにとって辛いことであっただろう。その種の抑えられた感情が、ピップがエステラに愛を告白する場面に感じとれる。

「君が知っているように、僕は君を愛している。僕が長い間熱烈に君を愛していたことは知っているはずだ。—（中略）—僕はいつの日か君を僕のエステラと呼ぶことを望んではない。僕はもうじき自分がどうなるのか、どんなに貧乏になるのか、どこへ行くのか分からない。それでも尚、僕は君を愛している。この家で初めて君を見た時以来、僕は君を愛し続けてきたんだ。」<sup>8)</sup>

この熱烈な告白には、今までのピップには見られないような気迫が感じられる。このピップはディケンズそのものである。まるでディケンズに



代わってエレンの気持ちに問いかけているようである。こんなピップの情熱に打たれて、エステラも精一杯の返答をする。

「私はこのことについて、あなたを励ますために努力したつもりです。ねえ、そうじゃなくって。」— (中略) —

「僕は君がそんなことでやしないと思ったし、そう望んだんだ。エステラ、君はそんなに若くて、素直で、美しいんだよ。」— (中略)—

「それは私の中に形成された本性の内にあるの。私がこんなにお喋りするの、あなたと他の総ての人達をまるで区別しているんだわ。私はこれ以上どうすることもできないわ。」<sup>9)</sup>

このエステラの返答の中に含まれている好意的な感情もディケンズの願望なのだろう。ディケンズはエレンに対して、作中で問い作中で答えているのである。もし、エステラをエレンに見立てていなければ、同い年位のピップがエステラに対して、「そんなに若くて素直で……」などという言葉が出てくるはずがない。これは正に、年齢の随分違うディケンズが若いエレンに向かって言っている言葉である。身も心も若返ってしまいそうな恋をしているディケンズにとって、若いエレンの冷たい落ち着いた態度がはがゆかったに違いない。

ディケンズが最もエレンを意識して書いたのではないと思われるのは、結末である。第五十九章だけ、その前までの章と比べて随分と感じが変わってしまっている。この結末がディケンズの友人、ブルワー・リットンの勧めにより校正刷りの段階で書き換えられたことは、ジョン・フォースターの伝記によって知られる有名な話である。先に書かれた結末は、エステラが離婚したところまでは改作と同じである。しかしその後エステラは Shropshire の医者と再婚するが、その医者には資産はなく、二人はエステラの財産で暮らしをたてている。そしてジョーの子供をつれたピップにピカデリーで偶然出会い、その子供をピップの子と勘違いして、ピップの幸せを確認したところであっさり別れるという話

である。二つの結末に関しては多数の意見が述べられているが、私は書き換えられた結末の方がこの物語には好ましいと思う。前までの暗いイメージとは違って変わって、多少異質な感じもするが、今までの辛かったことは総て忘れてこれから二人で人生を一からやり直そうという明るい場面で終わっている。この物語が暗く幻滅の物語だからといって、悲劇で終わらなくてはならないということはない。ピップは恋に破れ遺産をなくし、「gentleman」の夢を捨て、エステラは若き良き日を無駄にし、女性の幸せである結婚に失敗する。この総てを失った二人が偶然にも一番最初に出会った場所で再会する。そしてお互いの苦労を一番良く知っている者同士手を取り合って再度未来に向かって新しいスタートをきる。もしかしたら、これが一番自然な形なのかもしれない。ハッピー・エンドは誰もが望んでいる結末である。これはいつの世も変わらないものだろう。ディケンズは大衆の反応をうかがって作品を書き進めていったと言われているが、この作品の結末は多くの読者の望むところではないだろうか。ディケンズ自身もこの結末を書こうとした気持ちの中には、エレンとの恋路にかける願いのようなものもあったに違いない。エレンの魅力の中には、一大作の結末をも変えてしまう何かがあったのだろう。

若い頃のエステラは、とても美しく高慢で、その心は氷のように冷たく乱れることがなかった。そしていつもピップの心を支配していた。

君は、あれ以来僕が見た総ての景色の中に存在している。――川の上に、船の帆の上に、沼地に、雲の中に、明るい所に、暗い所に、風の中に、森の中に、海の中に、そして街路に。君は僕の心がかつて知りえた総ての優雅な空想の化身であった。エステラ、僕の人生の最後の一時間まで、君がどう思おうと、君は僕の性質の一部としてとどまり、僕の内のわずかな善、わずかな悪となって生き続けるのだ。<sup>10)</sup>

エステラは表面的には冷たく振る舞っていたが、実は心根の優しい無器用な少女であったのだろう。高慢で冷静に振る舞うことを教えられたエ

ステラは、真の愛情表現の仕方を知らなかった。思ったことを素直に口に出さないで、ただピップが自分に魅かれられないよう冷たい言葉をかけることだけが、エステラの唯一の愛情表現だったのだ。かわいそうにエステラは、自分で自分を上手に操ることが出来ず、新しく生まれてくる感情に対処する方法も見つけることができなかった。何故なら、そんなことは物心がついて以来、一度も教わらなかったからだ。ただ、世の男性を悩殺し冷たくあしらひ落胆させる事だけがエステラの役目だった。それ以外の感情というものは何一つ必要とされていなかったのだ。エレンはとても魅力的な女性であったが冷たかった。ディケンズの目にはまるでエステラのように、自分の心を上手に操ることの出来ない女性にうつったのかもしれない。そして、エレンの閉ざされた心を解きほぐすように、作中でエステラの心を柔らげていったのではなかろうか。エステラはドラムルとの愛のない惨めな生活を通して、再び生まれ変わった。そして離婚後、ピップと再会する。

彼女の若々しい美しさは全くなかった。しかし、あの言語に絶する程の威厳と魅力は残っていた。彼女の内に秘められたそのような魅力は馴染みのあるものであったが、私が以前に見ることができなかったものは、かつての誇りある目の悲しみに柔らいだ輝きであった。そして私が以前に感じることができなかったものは、あの冷たい手の親しみのある感触であった。<sup>11)</sup>

エステラは苦しみを乗り越えて、総てを失うことによって、今までの美しいだけの人形から生身の人間の温かみのある女性となった。

ディケンズは家庭を捨て、エレンの許へ走ったが、結局は又、エレンの中に家庭を求めていたようである。エステラは以前はただ美しく、俗世間とかけ離れたどこか遠い世界で生活しているような女性であった。しかし時を隔てて再会した時のエステラは、穏やかな母性を持ち合わせた女性に変わっていた。

エステラはディケンズの手によって、さらに魅力的な女性に生まれ変わったのだ。

男性が理想の女性を頭の中に描く時、真っ先に浮かんでくるのは母のおもかげだろう。そして結局は自分の母のような女性を一生のパートナーとして選ぶ。家庭環境とは、個人の形成に大きく影響を与えるものである。その環境の中で男性にとって母親の占める割合は何よりも大きい。父親は一家を支えていく大黒柱であるが、母親は家庭の象徴である。子供達は母親の中に家庭を見るのだ。

ディケンズの少年時代はとても暗いものであった。靴墨工場での労働を誰よりも喜んでいた母親の存在は、ディケンズにとって家庭の象徴どころか憎しみの対象ですらあった。ディケンズの母が誇り高い少年ディケンズに与えたものは、家庭愛とはほど遠い惨めな労働であった。この多感な少年期の出来事の数々が、ディケンズを一種のかたわにした。ディケンズにとって当時の社会の代表であった母がディケンズに与えた屈辱は、後のディケンズの人格を形成したといってもいいだろう。

ディケンズは母の愛、つまり家庭愛に飢えていた。ディケンズの描く女性達が何か現実離れしていたのは、ディケンズが家庭の味、すなわち母性愛を知らなかったからである。だからディケンズは、女性とは家庭的でなくてはならないと強く思うようになっていた。そしてマライアの家庭に家族の団欒を見た時、マライアの家族に、そして特にその中で守られているマライア自身に恋心を抱くようになった。家族に守られて大切に育てられているマライアにとっても魅かれたのは、マライアが掛け替えない家族の愛情を一心に集めていたからである。もしマライアがディケンズと同じ様な生活状況の中にいたとしたら、彼女に恋することはなかったかもしれない。母についても、経済的に恵まれていなかったからこそ家庭の人たりにえなかったのだ、とディケンズは思っていたかもしれない。マライアとの初恋に破れた時、経済的に恵まれていさえすれば、念願の幸せが手に入るものと思い込んでしまった所があるようである。

しかし経済的に安定し結婚しても、妻となったキャサリンには心の安らぎを見いだせず、その妹メアリーの中に居場所を求める始末であった。メアリーは若くしてこの世を去ってしまうが、この時以来、マライアとの一件で受けた印象は一段と強まり、ディケンズの作品の中に美しく純真無垢で、豊かな暖かい家庭に育った、優しい善のイメージを掲げた女性達が登場するようになる。それもエレンと出会ってから、ディケンズの女性観に更に変化が見られてくる。美しさや人を魅きつける魅力はそのままだが、ディケンズが守ってあげなくてはならない弱々しい女性から一転して、しんが強くしっかりした、「単に捲怠と自己嫌悪をもてあました女性ではなく、独自の要素を持った一個の人格としての多面的な要素を持ち合わせた女性」<sup>12)</sup>を、愛情を以って描くようになるのである。

女性は男性に甘えるだけでなく、ある時は男性を引っ張っていくような力強さを内に秘めている。美しい顔だち、そしてその穏やかな性質の内に、女性は想像を絶するような厳しい一面を持っているものである。

ディケンズはエレンとの出会い以降、今まで求めてきた女性の外面的な美に女性本来の性質を加えて、「精神的に強い女性」を作中においても実生活においても永遠に求め続けていったのだろう。

#### 注

- 1) 藤村公輝「初恋の頃」：『外国文学研究』26号（立命館大学，1973），p. 63 参照。
- 2) 同上 p. 64.
- 3) Charles Dickens, *David Copperfield* (The Penguin English Library, 1966), pp. 534-35.
- 4) Michael Slater, *Dickens and Women* (J. M. Dent & Sons Ltd, 1983), pp. 65-66.
- 5) 榊井迪夫・田辺昌美編『ディケンズの文学と言語』（三省堂，1972），p. 26.
- 6) Charles Dickens, *Great Expectations* (The Penguin English Library, 1965), pp. 253-54.
- 7) アンガス・ウィルソン著，松村昌家訳『ディケンズの世界』（英宝社，1979），p. 253.
- 8) *Great Expectations*, p. 375.
- 9) *Ibid.*, p. 376.

- 10) *Ibid.*, p. 378.
- 11) *Ibid.*, p. 491.
- 12) 『ディケンズの文学と言語』 p. 27.